

科学技術の潮流

JST 研究開発戦略センター

④

衰退目立つ

一般に科学技術と言は、リチウムイオン電池の研究で、日本の吉野博士が受賞した。この受賞を受賞するに至る研究開発をした1980年代は、日本は世界的な競争力を持つ工業国であり、それを支える学術的基盤・基盤も強かった。しかし、この10年以上にわたって、日本の工学基盤の衰退が目立ってきている。言い換えると、日本の工業力を支える高度な工学基盤があり、その

がるのである。

今回のノーベル賞

認識の薄さ

一方、米国やドイツ

強い高度な工学基盤があり、それを基にした卓抜なアイデアから生まれる。物事や製品のノベーション創出に対して持つ重要性を認識しており、常に、その高度化に努めている。それらの国は、高度な工学基盤を必要とする航空宇宙などの先端輸

科学はそのままでは人間の社会に役立てることが難しい。そこで、工学という両者の仲立ちの学術が創られ、それを介して、社会課題解決のため、科学と技術を基にした工学的創意工夫が行われ、それが科学・技術イノベーションにつな

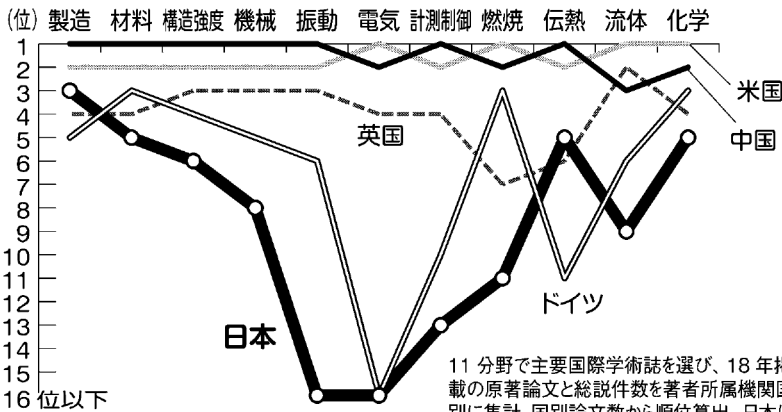
イノベ 工学基礎・基盤を高度化 強国へ



科学技術振興機構(JST) 研究開発戦略センター 上席フェロー 佐藤 順一

東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。IHI入社、取締役常務執行役員技術開発本部長、IHI検査計測代表取締役社長を歴任。日本機械学会会長、日本工学会会長も務めた。16年より現職。工学博士。

日本の工学基盤の衰退が目立ってきている



送機器分野やエネルギー分野で高い競争力を維持している。逆に、日本では団塊の世代の大学や企業が退場もあり、工学の基盤が諸外国に比べ弱体化し、イノベーション創出が起きにくくな